

選手としての輝きより オリンピックの華やかな世界より 大きな“志”で 日本の教育を変える

柔道の本質に学び、親子の絆を深める
「スポーツひのまるキッズ」プロジェクト

株式会社ジャパンスポーツコミッション 代表取締役

永瀬義規 Yoshinori Nagase

全国各地でのべ3700組以上の親子が参加する「スポーツひのまるキッズ柔道大会」。草の根活動ながら、たった7年間で上場企業をはじめとした300社以上の協賛を集める一大イベントへと成長した。仕掛けるのは、株式会社ジャパンスポーツコミッション代表取締役の永瀬義規氏だ。なぜ永瀬氏は、これだけの規模へと事業を成長させることができたのか。スポーツビジネスにかける思いとともに、その歴史をうかがった。



子どもと親がともに参加し
スポットライトを浴びる場所

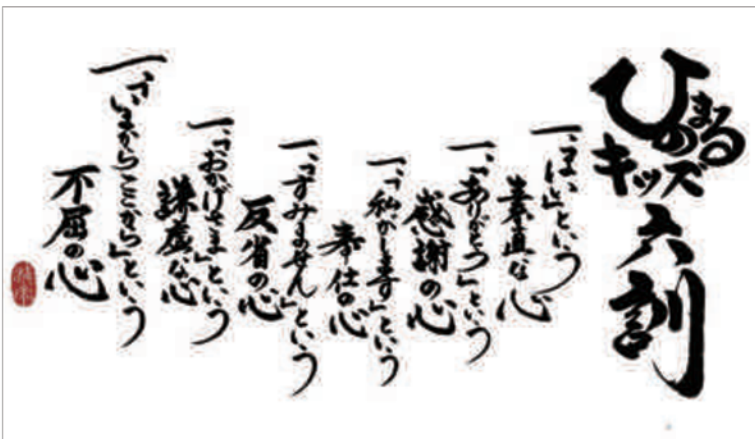
その大会は、一風変わった風景から始まる。選手（子どもたち）は、親・指導者とともに一組になって入場。試合前には選手だけでなく親も対戦相手に向かって一礼し、好成績を取れば

親も一緒に表彰状を受け取る。親子がともに戦うことで、その絆を深めることが最大の目的となっているのだ。従来のような「実力本位」の大会ではなく、真摯に柔道に取り組む子どもたちができるだけ多く出場できるように、スポットライトを浴びる機会を創出している。前後して開催される練習会で

は、シドニーオリンピック金メダリストの井上康生氏など、柔道界の著名人が講師を務めることもある。一連のイベントの発起人であり、すべての企画・運営を手掛ける永瀬氏は、かつて中央大学時代に「一般入学生として史上初めてレギュラーを勝ち取った」という伝説を持つ柔道家でもある。

「スポーツひのまるキッズ」最大の特徴は、“親子”で参加すること。試合前の礼や選手宣誓も同時に行う。





自身の経験から、大会理念として「ひまのまるキッズ六訓」を掲げた。柔道の本質的な教えが大会へ挑む子どもたちの心に刻み込まれ、それを親とともに体現することで、明るい家族関係、ひいては明るい地域社会を作っていく。「私たちはスポーツイベント事業ではなく、日本の未来に貢献する教育事業を展開しているんです」。永瀬氏は、どのような道のりを経て現在のビジョンを得るに至ったのか。

選手として苦労した経験が 若手社会人時代の糧に

子どもの頃から、勉強もスポーツもそつなくこなせるタイプ。柔道を始めると、メキメキと腕前が上達していった。「周囲にちやほやされて、いつも調子に乗っているような子どもでした」。そんな中で、永瀬氏に最も厳しく接したのは父親だったという。将来のことを考えてか、大学は柔道推薦ではなく一般入学に挑戦しよう命じられ、一浪の末に中央大学に入学した。「結果的にその選択が今の自分を創り上げたんです」と永瀬氏は目を細める。

当然の流れで柔道部に所属したが、周りは推薦入学の特待生ばかり。レギュラーを務める先輩に練習で勝ったとき、自らの立場を悟った。「一般生に投げられやがって！お前は何をやってるんだ！」。指導者が発した言葉は自分への賞賛ではなく、特待生でありながら一般生に敗れた先輩への厳しい叱責だったのだ。必死で稽古に励む日々。そしてついには同校柔道部80年の歴史の中で初の「一般生レギュラー」とな



PROFILE

永瀬義規 (ながせ・よしのり)

幼少期より柔道を始め、中央大学在学中には一般生初のレギュラーに。卒業後はベースボールマガジン社へ就職し、『近代柔道』編集長として『近代柔道杯』設立に携わる。その後、渡米してスポーツマーケティングを学び、平成6年に帰国。全日本柔道連盟や日本オリンピック委員会での広報・宣伝責任者を経て、平成20年に株式会社ジャパンスポーツコミッションを創業。一般社団法人スポーツひまのまるキッズ協会代表理事としても活躍している。

ったが、大会で華々しい成績を残すことはできなかった。才能と実力が支配するスポーツの世界は、子どもや学生にも容赦はしない。それを嫌というほど味わった競技人生だった。

就職活動では持ち前の負けん気とバイタリティをフルに発揮し、大手マスコミや広告代理店の内定を次々と勝ち取る。その中で選んだのが、多数のスポーツ誌を発行するベースボールマガジン社だった。配属されたのは、昭和54年から発行されている柔道雑誌の代表格『近代柔道』の編集部。まだまだ新人気分が抜けきらないある日、副社長からふいに「新しい企画を考えてみ

ろ」と指示が下る。

そこで永瀬氏が考案したのは、「誰もが出られる子どもたちの柔道大会」。強さだけを競うのではなく、柔道に向かう姿勢も含めて表彰し、雑誌に載せることで全国各地の柔道少年・少女たちにスポットを当てたい。それはかつて自身の経験から生み出されたアイデアだった。目標を設定し、それを達成するために走るプロセスは選手時代にしっかりと身につけていた。永瀬氏は外部から協賛金を集め、この大会を収益面でも成功させる。これが後に、国内屈指の中学生大会として名を馳せる「近代柔道杯」の始まりだった。



シドニーオリンピック柔道金メダリストとの一枚。
（左から瀧本選手、永瀬氏、野村選手、井上選手、田村選手）

オリンピック広報責任者としての華やかな日々

転機が訪れたのは28歳のとき。選手時代からの恩師に誘われ転職した先で、日本の柔道界の将来を見据えた海外マーケティングを命じられる。アメリカに渡って4年間スポーツマーケティングを学び、その後は全日本柔道連盟へ。アトラクタオリンピックでは、柔道だけでなく全競技の広報の窓口であるプレスアタッシェを担当し、CMやテレビ番組出演を通じて選手を大量に露出させた。マスコミの間では次第に「柔道選手のマネジメントを一手に操る男」としてその名が知られるようになる。「アトラクタで田村亮子が負けたのは永瀬

のせいだ」とバッシングされたこともありましたが、それぐらい広報宣伝に力を割き、選手のPRを積極的に行っていました」と振り返る。続くシドニーオリンピックでも広報責任者を務め、華やかな世界の一員として生活ぶりはどうどん派手になっていった。しかし、それは永瀬氏が本当にやりたいことではなかった。

「そんな暮らしが5年ほど続き、あるときふと考えたんです。『俺はもともと、実力では光が当たらない子どもたちにも柔道の喜びや誇りを伝えたいという信念を持っていたはずだ』と。再び、一念発起すべきタイミングだった。柔道連盟やオリンピックに関わる活動に別れを告げ、古巣であるベースボール・マガジン社に役員として戻った7年後、永瀬氏は現在のジャパンスポーツコミッションを創業。かつて自身から構想を広げ、平成21年に「スポーツひのまるキッズ」の活動を始めた。それは同時に、自分自身の力で「スポーツで飯が食える会社」を本気で作るための挑戦でもあった。

我が子とともに親も成長 そんな姿に光を当てたい

永瀬氏には、スポーツひのまるキッズ柔道大会での忘れられない一コマがある。その男の子に付き添っていた父親は、お世辞にも大人の常識的な服装をしているとは言い難く、まるで不良少年のような出で立ちと態度だった。子どもは年々上達し続け、永瀬氏が表彰式でその父親と向き合う機会も増えていったが、彼は相変わらずの姿。しかし数年後、とある会場でその父親に再会した永瀬氏は目を見張った。まるで別人のようにビシッとスーツに身を固め、遠くから元気に自分へあいさつしている。「息子に恥をかかせないようになりたいと思ったんです」。父親は照れながら、そう話したという。柔道選手として、人として成長する我が子を見て、親もまた成長していく。選手として大成するかどうかは分からなくても、かつてのようになりつかりとスポーツを当て続けよう。今や20代の頃とは比較にならないほど豊かになった自身のコネクションを使って、さま

ざまな媒体でこの姿を発信している。永瀬氏は、そんな使命感で身を固めるようになった。

気付けば、永瀬氏の思いに共感する協賛企業は300社を超える数となった。柔道界の恩師や、名を馳せた大物選手も続々と協力の名乗りを上げてくれている。「スポーツでしつかり飯を食える会社」として、今後のさらなる大規模展開も視野に入った。子どもたちの身近な存在として柔道を教える道場は、日本に3000以上あると言われる。そのほとんどが事業と言えようなものではなく、志ある柔道家がボランティアで運営しているような状況だ。

「柔道を通じた人間教育を発展させていくためには、こうした道場の力が欠かせません。できれば、各地の道場も商売として成り立つように共存共栄の関係を築いていきたいと思っています」。さらに今年からバスケットボール大会、来年にはソフトテニス大会開催と、スポーツひのまるキッズの夢は大きく広がる。永瀬氏の志は、さらに大きなうねりを起こそうとしている。